

漢法苞徳塾資料	No. 264
区分	治療論・補瀉
タイトル	補瀉論の問題 特に「泄」法をめぐって
著者	八木素萌
作成日	1992.10.10

★触診の虚実も脈診の虚実も補瀉決定の決め手ではないという『内経』『難経』の記述と、これを敷衍した後世の記述の一つ（汪機『鍼灸問対』）を見ると、これらに記述されている補瀉決定論の明瞭な立場は、昭和期以来の日本鍼灸界では十分に受け継がれて来てはいないと言わざるを得ない。この点は江戸期の鍼灸とは違っているように見受けられる。このイキサツの研究と考察が必要であろう。

★『靈枢』九鍼十二原第1の「…凡用鍼者 虚則実之 満則泄之 宛陳則除之 邪勝則虚之…」〈凡ソ鍼ヲ用イル者ハ 虚ナレバ之レヲ実シ 満ナレバ泄シ 宛陳ナレバ除キ 邪勝ツモノハ虚セシム〉は鍼運用を四つに大分類している。ここでの「宛陳」については今日に言うところの「細絡」「血絡」であるが、「満」については解明不足である。

★『靈枢』九鍼十二原第1を解説する重要な篇と見なされている『靈枢』小鍼解第3には

「…往者為逆者 言氣之虚而小 小者逆也 来者為順者 言形氣之平 平者順也 明知逆順 正行無問者 言知所取之処也…」

〈往ク者ハ逆ト為ストハ 氣ノ虚シテ小クナキヲ言ウ 小クナキモノハ逆ナリ 来タル者ハ順ト為ストハ形ト氣ノ平ナルヲ言ウ 平ナルモノハ順ナリ 明ラカニ逆順ヲ知レバ正行シテ問ウコト無カレトハ所取ノ処ヲ知ルヲ言ウナリ…〉

「…迎而奪之者 瀉也 追而濟之者 補也 所謂虚則実之者 氣口虚而当補之也 満則泄之者 氣口盛而当瀉之也 宛陳則除之者 去血脈也 邪勝則虚之者 言諸經有盛者 皆瀉其邪也…」

〈…迎エテ之レヲ奪ウハ瀉ナリ 追ウテ之レヲ濟スルハ補ナリ イワユル虚スレバ之レヲ実ツセシムトハ 氣口虚ニシテ当ニ補スベキナリ 満ナレバ之レヲ泄ストハ 氣口盛ンニシテ当ニ之レヲ瀉スベキナリ 宛陳ナレバ之レヲ除クトハ 血脈ヲ去ルナリ 邪勝ツトキハ之レヲ虚セシムトハ 諸經ノ盛ナル者ヲ言ウ 皆ソノ邪ヲ瀉スナリ…〉

「…徐而疾則実者 言徐内而疾出也 疾而徐則虚者 言疾内而徐出也…」

〈…徐ニシテ疾ケレバ実ストハ 徐ニ内レテ疾ニ出ダスヲ言ウナリ 疾ニシテ徐ナレバ虚ストハ 疾ニ内レテ徐ニ出ダスヲ言ウナリ…〉

のように記述されている。ここには、二つの問題がある。

★「虚」に「補」す判断は「気口虚」に従うと言うのである、「実」に「瀉」すのは「諸経有盛」は「邪勝」だからであると把握している、つまり「虚実」の判定尺度が異質なのである、これが一つの問題点である。

この問題は次のような奥行きがある問題点である。即ち、『難経』「八十一難」「十六難」「四十九難」などの記述の「補瀉は脈に従うのでは無く病そのものの虚実に拠れ」と言う主張と異なっている点、『四十八難』の「脈の虚実」「病の虚実」「診の虚実」についてそれぞれの判断の尺度を示している記述には「ズレ」という他はない点である。

この点での「ズレ」とは、『難経』とその系譜の記述では病の虚と実（または病の大過と不及）の判断で補瀉を決定しているのに、ここの記述では「補」は脈の虚の判断により「瀉」は切診・触診によってその経に「盛」（実）を診てから決定している、こう言う相違である。

『三十七難』には病の「脈」（ここでは主として経脈の意味のように見える）への反映「陽脈は気の停滞で盛になる」「陰脈は血の停滞で盛になる」つまり経脈上に「盛」が表現されると言う認識があり、また「腑病は癰」「臓病は七竅不通」つまり「腑病」＝陽病は肌表での邪気と正気の争いが「癰」のような鬱滞および発熱の状態になり、臓病では五官の機能低下の状態になると言う認識があることを記述している。このように把握した記述に照らしても「ズレ」が見られる。この点での「ズレ」とは、『難経』は触診・切診によって診られる「脈」（ここでは経脈）上の「盛」（気または血の停滞によって起こっている経脈上での盛の現象）に〈「気」「陽脈」「腑病」「熱」〉の変動と、〈「血」「陰脈」「臓病」「五官の機能低下」〉とを区分している記述であるが、この『靈枢』小鍼解第3の記述は、「瀉」の鍼法の為に「邪勝」＝「経有盛」を診ることになっている、こういう両者の把握の質的な相違である。

★二つめの問題点は、「…満則泄之者 気口盛而当瀉之也…」〈満ナレバ之レヲ泄ストハ 気口盛ニシテ当ニ瀉スベキナリ〉（『靈枢』小鍼解第3）について「満」の状態は「気口盛」になるという認識であるのか？、或は、「気口盛」のことを「満」と表現した修字法の表現であるのか？、説明的な文がこの篇には見られないのである。他の篇では「満」を用いるのは如何なる場合であるのか？、このような問題である。

★「…満而補之 則陰陽四溢 腸胃充郭 肝肺内臆 陰陽相錯…」〈満シテ補ヘバ則チ陰陽ニ四溢シ腸胃ハ充郭シ肝ト肺ニハ内臆シ陰ト陽トハ相イニ錯ル…〉（『靈枢』根結第5）とあるが、これは「泄法」を行なわなければならないのに「補」したから表裏内外も臓腑も「充郭」「内臆」「相錯」のような「溢」になっている、と言う誤治の戒めであろうが、全身的な浮腫・腫脹を言っているかのようである。所が「気口」「満」つまり「充満した脈状」と言うのであれば、この脈状で「全身的な浮腫・腫脹」が生じる状態について『内経』は如何に記述しているであろうか？

★〈「泄」は「瀉」す事だ〉と言うのであるから、これは〈「諸経有盛」は「邪勝」だから「瀉」す〉と言っている場合の「瀉」とはどう異なるのか？「実を瀉す」のと「満を瀉す」のとどう違うのか？と言うのが問題である。

★関連があると思われるので、『靈枢』官鍼第7の

「…病在中者 取以長鍼 病水腫不能通關節者 取以大鍼 病在五臟固居者 取以鋒鍼 瀉于井榮分輸 取以四時…」

〈病中ニ在ル者ハ取ルニ長鍼ヲ以テシ 病水腫シテ關節ヲ通ズルコト不能ノ者ハ取ルニ大鍼ヲ以ッテシ 病五臟ニ在リテ固居セル者ハ取ルニ鋒鍼ヲ以ッテシテ井榮ノ分輸ヲ瀉ス 取ルニハ四時ヲ以ッテス…〉

と言う記述の臨床的な理解問題があり、

「…一日輸刺 輸刺者 刺諸経榮輸臟腑也 二日遠道刺 遠道刺者 病在上 取之下 刺府腧也 三日経刺 経刺者 刺大経之結絡経分也 四日絡刺 絡刺者 刺小絡之血脈也 五日分刺 分刺者 刺分肉之間也…」

〈一ニ日ク輸刺 輸刺トハ諸経ノ榮輸臟腑ヲ刺スナリ 二ニ日ク遠道刺 遠道刺トハ病ノ上ニ在レバ之レヲ下ニ取りテ府ノ腧ヲ刺スナリ 三ニ日ク経刺 経刺トハ大経ノ結絡ヲ経ノ分ニ刺スナリ 四ニ日ク絡刺 絡刺トハ小絡ノ血脈ヲ刺スナリ 五ニ日ク分刺 分刺トハ分肉ノ間ヲ刺スナリ…〉

の部分や

「…七日輸刺 輸刺者 直入直出 稀発鍼而深之 以治気盛而熱者也…十日陰刺 陰刺者 左右率刺之 以治寒厥 中寒厥足踝后少陰也…十二日賛刺 賛刺者 直入直出 数発鍼而浅之出血 是謂治癰腫也…」

〈…七ニ日ク輸刺 輸刺トハ直ニ入レ直ニ出ダシ 稀ニ発鍼シテ深クシテ以ッテ気盛ノニシテ熱スル者ヲ治スナリ…十二日ク陰刺 陰刺トハ左右ニ率シク刺シテ以ッテ寒厥ヲ治ス 寒厥ニ中タルハ足ノ踝后ノ少陰ナリ…十二ニ日ク賛刺 賛刺トハ直ニ入レ直ニ出ダシ 数シバ発鍼シテ浅クシテ血ヲ出ダス 是レ癰腫ヲ治スルコトヲ謂ウナリ…〉

の部分、

「…二日豹文刺 豹文刺者 左右前後鍼之 中脈為故 以取経絡之血者 此心之応也…四日合谷刺 合谷刺者 左右鶏足 鍼于分肉之間 以取肌痺 此脾之応也…五日輸刺 輸刺者 直入直出 深内之至骨 以取骨痺 此腎之応也…」

〈…二ニ日ク豹文刺 豹文刺トハ左右前後ニ鍼シ脈ニ中タルヲ故ト為シテ以ッテ経絡ノ血ヲ取ル者ナリ 此レ心ノ応ナリ…四ニ日ク合谷刺 合谷刺トハ 左右ニ鶏足ニシテ 分肉ノ間ニ鍼シテ以ッテ肌痺ヲ取ル 此レ脾ノ応ナリ…五ニ日ク輸刺 輸刺トハ直ニ入レ直ニ出ダシテ深ク内レテ骨ニ至ラシメテ以ッテ骨痺ヲ取ル 此レ腎ノ応ナリ…〉

の部分などは、どうやら関連していそうである。

- ★病症記述の側から、更に「満」に対する「泄」の鍼である「瀉」とは、どのような内容であるかを追及して、イメージの具体化を図りたい。

その手掛かりの一つは、『靈枢』根結第5の「…満ニシテ補ヘバ則チ陰陽ニ四溢シ 腸胃ハ充郭シ 肝ト肺ニハ内臍シ 陰ト陽トハ相イニ錯ル…」の記述にあるから、浮腫・腫脹に関する病症と治療の記述を調査して、鍼法との関連を考察する事にある。

また、「満」と「腫」と「脹」と「溢」や「泄」と「越」などについての『内経』の記述部分を調査して考察する事も手掛かりを求める一つであろう。

- ★「満」

- ★「腫」と「脹」

- ★「溢」

- ★「泄」と「越」